立正社会福祉研究　第12巻２号（2011）45～49

デンマークの福祉施設に学ぶ「共同の場」

中　村　尚　子*

はじめに

2010年９月，デンマーク，スウェーデン，フィンランドの３ヵ国の福祉と教育に関する視察をする機会を得た（NPO 法人発達保障研究センター主催）．本研修は，障害者権利条約をすでに批准した３ヵ国において，条約第19条「自立した生活および地域社会へのインクルージョン」がどのように理解され実践されているのかについて聴取することを目的の一つにしたものだった．全13施設を見学した中から，デンマークの高齢者施設と障害者施設（支援）について報告する．

1　高齢者施設（住宅）

コペンハーゲン空港から列車で２時間半ほど，ユトランド半島の東端，海峡の町，フレデリシア市（人口約５万人）にある介護付高齢者住宅オセロ（Othello）を訪問した（視察日　９月23日）．

介護付高齢者住宅オセロは，2009年９月に開所した最新の施設で，６階建ての中に，住居119戸とデイサービスの機能を有している．

シェークスピア劇場をイメージしたという円形の建物が林の向こうに見える（**写真１**）．自動車道から林の小道を通って，ドーナッツ型の建物の内側にある玄関にたどり着いた．ちょうどデイサービスの利用者のバスが到着したところだった．

所長のグレタ・ヨーセンさんに講義を受け，館内を見学した．

2009年６月から少しずつ入居を受け付け，９月に本格開所．設計は，コンペで採用されたもので，「音と光」をテーマにしている．外からの音を遮断し，中庭で音楽会などを催すと上の方にも響き，またどこにいても柔らかな光が入るように設計されているという．

６階建ての２～６階，５フロアに119の住居がある，

写真１　オセロの全景（パンフレットから）

写真２　オセロの住居のサニタリースペース

１階にはデイセンター，ゲストルーム（家族の宿泊施設），歯科，理学療法室，カフェテリアなどがある．デイサービス利用者は34名．職員150人（フレデリシア市の職員）．

居住空間の基本は，ベッドが二つ入る寝室と居間，キッチン，トイレで，広さは59m²が標準だ．夫婦での入居を想定した75m²の部屋も11ある．

＊立正大学社会福祉学部社会福祉学科
キーワード：デンマークの福祉，住居，共同の湯

アンナさんとヘンリュックさん，それぞれの部屋を実際に見せていただいた．個人の家具調度，家族の写真があるまさに「家」だ．サニタリースペースには，シャワー，洗濯機と乾燥機が設置され，トイレはたいへん広い（**写真２**）．すべてに手すりや介護しやすい器具がついている．お二人とも独歩可能だが，どの部屋も車いすを使うときに必要なスペースが確保されているためにたいへんゆとりがある．ヘンリュックさんは夫婦で住んでいたが一月前に伴侶が亡くなったそうだ．

オセロの最大の特徴は，各フロアに２カ所ずつ，全体で12の共同スペースを設けていることだ．円形の内側に向けて22のテラスもある．「住まうこと」と「集うこと」を追求しているところに特徴がある．

共同のスペースには台所もついていて，ここで職員と一緒になってパンやケーキを焼くなど，できることをやる．部屋にこもらないで，集うこともできる生活帯（生活リズム）を重視した介護をめざしている．

デンマークでは，1987年以降，施設ではなく個人の住まいで介護が受けられる高齢者住宅の建設がすすめられてきたが，フレデリシアの高齢者住宅は，バスルームがなく狭いところが多かった．これを改善しようと計画が練られたさいに，「共同の場」という観点でこれまでの高齢者住宅を見直し，実現したのが「オセロ」である．個人の住まいと集いの空間をゆとりをもって実現したことに特徴がある．

ヨーセン所長はつぎのように述べた．

「一人になりたいときはなれる．みんなといたいと思えば共同スペースに出てこられる．もちろん，みんなでやることは強制はされない．しかし，一緒に笑ったり，他人と顔を合わせることで，必ず変化がある．」

実際，訪問した午前の時間帯，共同のスペースでくつろぐ人，職員とパン焼きの準備をしている人の姿があった．

フレデリシア市では，市内の高齢者を訪問して把握している．訪問によって，自分一人では生活ができない，あるいは24時間の訪問介護を利用しても生活が困難と判断された人がリスト化されている．この中から希望者がオセロをふくめて市内の介護付高齢者住宅に入居している．入居の申し出があったら，３カ月間待機にしてはいけないことになっているが，オセロができて，実際には待機期間はさらに短くなったそうだ．

オセロには医師や看護師はいない．医療が必要になった場合は，それぞれの家庭医（ホームドクター）が対応することになっている（デンマークでは，国民医療の制度としてホームドクター制（資格制度）があり，住民登録と一緒に自分の家庭医を決める．受診料は無料）．

居住にかかわる費用は，入居者が支払うが，すべて個人の年金で支払いが可能だ．

ここに住んでいる人にも，仕事をしている人にも，責任をもっていると前置きした上で，「住んでいる人には希望に合わせて生活をつづけられるように，そして職員に対してはよい職場であるように」がオセロのミッションだと述べた所長の言葉が印象に残った．

「老人」になるまでの人生の違いや国民性，寝たきりにしない努力の結果もあるのだろう，ベッドに横たわってケアを受けている人の姿はなかった．「みんな元気な方ですね」という質問に，「ここに来て元気になった人もいる」との答えも返ってきた．

視察のちょうど１カ月前から日本を「席巻」していた行方不明の高齢者の報道を思い出しつつ，公的責任での高齢者福祉の厚さを実感してオセロをあとにした．

2　精神障害者への支援

フレデリシア市から海峡の端を渡って，ミゼルファート市（人口約37,000人）に移動し，精神障害者関係の施設を３ヵ所視察した．精神病歴史博物館（視察日　９月23日），支援センター・グループホーム（同），デイケアセンター（９月24日）である．

１）精神病院博物館

かつて精神病院だった建物の一部が，精神障害者と精神病院の歴史を伝える博物館として市民に公開されている．病院の敷地は広大で，建物がいくつも残され，それらはいまは企業や学校精神障害者の作業所などとして使われている．博物館はそのうちの一つである．元病院職員だった方が講義をしてくれた．

ミゼルファートは2007年の自治体改革で周辺の町と合併する以前は人口が18,000人だった町である．そこに，1888年，男女600人ずつ1200人収容の精神病院がスタートした．ときの日本は明治12年，呉秀三の活躍にはまだ少し間がある，1970年代に，入院（収容）ではなく，治療と支援を受けながら地域で生活する方向が徐々にとられるようになり，精神病院は縮小されてきた，90年代には大規模な病院はなくなった．精神病院の解体である．現在，市内には高齢化した人や老人性

写真３　拘束具とベッド（精神病歴史博物館）

写真４　グループホームの室内

のうつ病などに対応するために65床が準備されている．

博物館の各部屋には，年代順に当時の患者の入院生活や処遇がわかる写真や器具が展示されている．鎖，ベッドに付いた拘束器具（写真３），電気ショック治療の椅子など，非人間的処遇があったことがたいへんリアルに理解される展示だ．扉を開けると叫び声が聞こえてくる部屋もあった．ここの歴史は，当事者・家族をふくめて人間の権利をとりもどす歴史だったと，案内の方が語っていた．

２）支援センター併設のグループホーム

グループホームに併設された支援センターで，職員と３人の利用者から話を聞いた．

1987年開始，３階建てのグループホームには12人が居住している，60m²が一人の空間である．併設されている支援センターは，いわゆる利用者のたまり場のような共同のスペースでもある．支援センター職員は５人．OT の資格をもつ職員が１名，ほかは介護職で，生活指導員という資格をもっている人はいない（すべて市の公務員）．リーダーは別のところにいて，月に２回ほど相談に応じる．予算の裁量権はかなりある，５人の仕事は午前７時半から午後４時と午後３時から午後９時で，宿泊勤務はない．

支援センターの役割は，病気をもった人が社会から外れてしまわないように支援することにある．しかし「指導」ではなく，同じ立場で彼らのもっている力を引き出し伸ばす．そのことで，利用者自身の価値観が上がるようになることが大切だといった話があった．

具体的には，相談，生活のチェックと調整ができるように支援したり，各人が立てている月曜～金曜までの日課や週末の活動なども確認したり計画の見直しを行ったりする．こうしたことをつづけていくと，再発などに予防的に対応できるというねらいがある．共同のスペースの役割を「相談事があると，共同スペースである居間にくる．祭日や誕生日を一緒に祝う．ここはいわばベース（基地）．ここから仕事や，趣味の活動に出かける」という言葉で表現された．

利用者はどのように考えているのだろうか．三人の話を紹介する．

・住むところ（アパート）だけあって，仕事もあったとしても，一人では耐えられない．こうした場があれば，寂しさから抜け出せる．生きているという感覚を実感できる．一人になりたければ，自分のアパートに行けばいい．そうした場はある．
・同じような環境にある人と「一緒にできる」ことが大切なことなんだ．
・共同の居間はいつでもきれいに気持ちよくしておく．朝食のとき，一人でも出てこない人がいたら呼びに行く．買い出しやあとかたづけは分担．

住人たちは，自分たちの意見を支援センターの取り組みに反映させるために１カ月に一度話し合いをする．ここには，たとえば喫煙を禁止するにはなど，各人がテーマをもって出席する．多数決で解決するのではなく，意見を出しあう．「それぞれの立場を理解するプロセスが大事だと」とは，やはり利用者の言葉だった．

現在，日本の障害者施策では就労支援が強化されている．そのような考え方について質問したところ，「働きに行く人は行く．しかし，それをめざすというようなプレッシャーは病気の再発につながる」という答えが即返ってきた．

グループホームは18歳以上であれば入居できる．現在の利用者の年齢は36歳から70歳と幅広い．夜間は支援センター職員はいないので，急を要することが発生したら協力し合っている．

利用者の一人，マーソンさんがグループホームの自室を見学させてくれた（**写真４**）．私たちを歓迎するために，テーブルにはチョコレート．窓辺には異国の子どもの写真が立ててある．それは，彼が国際里親として支援しているナンビアの子どもたちだった．

３）日中活動の場「白い家」

日本流にすれば，精神障害者のデイサービスセンターとでもいえばよいのだろう．「ホワイトハウス」と呼ばれるセンターは，町中の２階建ての一軒家．この日はちょうど，利用者が海に出かけたとのことで，所長のエルサさんが案内してくれた．

平日は朝８時から夜９時，週末と休日は９時から３時まで開所していて，午前中は市で判定を受けた35名が利用しているが，午後からは市内在住の障害者はだれでも来てよいことになっている．職員は６名．

ここに来て，それぞれが好きなことをして過ごす場所である．朝食，昼食，夕食をつくることができるが，買い物に行くこと，つくることは利用者が分担する．地下にはビリヤードやダーツができるスペースがある．ドラムなどのセットもあり，バンド活動をやっている人もいるそうだ．

このセンターの役割は，このように，集いの場，「居場所」だ．エルサさんは言う．「利用者の多くはコミュニケーションに弱さをもっており，社会参加の上で援助が必要だ．一人でアパートに住んで寝起きはできても，買い物や乗り物の利用のトレーニングのように，社会に出ることの恐怖を取り除く援助が必要だ．しかし，けっして『ねばならない』はない．」

本人から連絡がない場合は，チームで訪問することになっている．

前日のグループホームの住人の中にもここの利用者がいた．二人の利用者がこうした居場所の重要性について体験的に話してくれた．

３　重度知的障害者居住施設

同じくミゼルファートの自然豊かなリゾート地の少し外れ，牧草地に囲まれた環境に，知的障害者の居住施設，ヴェステボがある（訪問日　９月24日）．ヴェステボとは，「西の住居」という意味だそうだ．正面に，いかにもデンマークらしい黄色い２階建ての建物，そして隣の敷地に平屋の住居が並ぶ（**写真５**）．所長のトーベン・ビャンロンさんに話を聞き，見学した．

写真５　ヴェステボ　居室の外観

写真６　個室（入口には住人の写真が貼ってある）

ここの事業は1936年に始まった．現在管理棟になっている黄色い建物が住居だったそうだ．さまざまな過程を経て２年前に現在の一人ひとりの居住の場を実現した．それまでは「施設的」な運営だったが，政治にも働きかけて，現在のような，「部屋」ではない「アパートに住む」という形にできた．一人当たりの居室は35m^{2}で台所とトイレがついている（**写真６**）．バスは共同．デンマークでは，すべての人に65m^{2}の居住空間を保障する法律があるが，ここはそれを少し削って，共同の空間に充てたという，18歳から最高齢は91歳（平均年齢47歳），22名が，長屋のようなアパートに住み，日中は共同のスペースで，作業や音楽を楽しんで，緩やかな時間を過ごしている．

ヴェステボはここのほかに，少し離れたところに，17名と24名が暮らす２つの居住の場を運営しており，職員は全体で115名いる．

実際の活動を見学した（**写真７**）．日本の施設でも接

写真７　ヴェステボの日中の活動のようす

することの多い，比較的重度の知的障害のある人たちが，絵画やさまざまなものづくりに取り組んでいた．一斉に作業をするという形ではない．それぞれが好きなことを楽しんでいる雰囲気だ．製品を売って収益を上げるという目的はない．それぞれがさりげなく，かつ相応しく部屋や庭に置いてあって，温かさを醸しだしていた．

ビャンロン所長はこうした活動の意義について次のように述べた．

「ここにいる人の発達的な年齢は５，６ヵ月から８，９歳だ．高齢者への支援と違って世話をされるだけではない，『これからを生きる』発達的な部分に重点をおいた支援が必要だ．はじめはいすに座ることしかできなかった人が，４年間でカフェに行って食事ができるようなった．生活のリズムをつくることも大事な支援だ．」

「町のアパートで一人で暮らすことを望む人には，パーソナルアシスタントなどの方式がある．ここでは，そうではないゆっくり暮らすことを望む人たちの場だ．」

入所者は年金で生活し，居住費や食費は支払っているが，施設の運営には１日１人あたり1500～1800デンマーククローネが市から支払われているそうだ．

まとめ

研修チームは，デンマーク視察の最後に，フレデリシアの元職員で，高齢者介護部門部長の職にあった，ゲオ・トマセンさんに質問する時間をもった．さまざまな質問と討論が飛び交ったなかで，印象に残った発言から引用してまとめとしたい．

2004年に，このチームがデンマーク研修を実施したさいに，トマセンさんは個を重視したケアの壁として「孤独」の解消を上げていたそうだ．訪問した各施設が「共同の場」を重視していたことの背景にはそうした問題認識がある．トマセンさんは「孤独」がすべて解決したわけではないが，予防のためのネットワークを模索していると答えていた．

人間の尊厳を尊重することの基本に個を中心に置くことはあたりまえだが，人が人として生きる上で，生活の基盤としての住まいや生活の保障とともに，人との交流や共同が大事なことを，実践で確かめながらシステムをつくっているそのことを学んだ研修だった．

（ヴェステボの写真は薗部英夫氏提供による）

（2011年１月31日受理）